

成城大学 プリズン・サークル上映に寄せて

本日はプリズン・サークルの上映を大学という場で企画してくださり、大変嬉しく思います。また、見に来てくださった皆様、心よりありがとうございます。

この映画はまず、撮影許可自体が降りないと言われ、制作に10年余りを費やしたわけですが、6年目にして撮影許可が降りた時点でも、様々な理由から映画にできないかもしれないということを恐れていました。過度に厳しい監視体制と検閲など、制作の条件が悪すぎたからです。

そしてたとえ映画化されたとしても、懸念されることがいくつもありました。いわゆる「刑務所モノ」として大事な何かを見過ごされてしまったり、受刑者を「あの人たち」と分類して見られてしまうのではないかと。かといって、単なるお涙ちょうだいモノや「いい話」として消費されるのも避けたい。刑務所のあり方や、登場人物が語る内容は、塀の外に暮らす私たちの価値観や有り様と繋がっているのだから、そこを嗅ぎ取れるような映画にできなければ失敗だ。そんな風に思っていました。完成するまで20回以上の中間試写を行ったのは、登場人物（とりわけ顔出しをしてくれている出所者）が納得できる形にしたいという思いと同時に、こうした問題をなんとか解決したいと思ったからです。

驚いたことに、試写の初期段階から聞こえてきたのは次のような声でした。「彼らは私だったかもしれない」、「自分もあの輪の中に入って語りたい」、「なぜ外の世界に本音で語れる場がないのだろう」、「主人公の皆さんはどうされてますか？元気で、無事でいてほしい」、「自分たちには何ができるだろう？」など。私の苦労や不安が吹っ飛んだことは言うまでもありません。

映画の封切りから6年が経ち、刑務所に関しては制度的な変化も見られます。たとえば、番号で呼ばれたり、名前を呼び捨てにされていた一般の受刑者も「さん」づけで呼ばれるようになったり、6月からは更生により力を入れる「拘禁刑」が施行予定であったり、その一環としてオープンダイアログを矯正現場に取り入れると公言していることなどです。

一方、本映画で見られるコミュニティをベースにした関係性、本音を語るための安全な場の構築、出所後の継続的支援コミュニティなどについては、ほとんどスルーされていると感じます。流行りのダイアログが表面的に導入されるだけで、本質的な変化には繋がらないのではと思ったりもしています。

本映画について、自分自身の中で、そして他者と、語り合ってみてください。そして、この社会のあり方や自分にできることは何かを、考えていってくださると嬉しいです。

坂上 香

2024年12月31日